

2026年度 沖縄大学
学校推薦型選抜

「国際コミュニケーション学科小論文」
問題用紙

2025年11月22日(土)
9:00～10:00

【設問】

日本では観光産業が成長する一方で、地域の生活や環境への影響も指摘されています。以下の新聞記事（の一部）は、観光を経済だけでなく、文化や倫理の視点から考える必要性を論じています。本文の内容を踏まえて、「観光を通じて地域や世界の人々とどのように関わるべきか」あなたの考えを600字から800字で述べなさい。文章からの引用も文字数に数えます。（本文の意見に賛成・反対どちらの立場をとってもかまいません。具体的な経験や事例を交えて書いてください。）

観光立国への旗振り役として観光庁が2008年に設置されて16年。人口が減り、少子高齢化の進む日本では観光産業振興の必要性が叫ばれる一方、その動きが地域の日常を一変させることもある。今、観光をどう捉えるべきか。

（中略）

何げない日常

そもそも観光とは何か。英国の社会学者ジョン・アーリは著書「観光のまなざし」で「日常から離れた異なる景色、風景、街並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけ」ること、などと定義した。

シンクタンクの日本交通公社で主任研究員を務める後藤健太郎さんは「日本人にとっては何げない日常に価値があることを、訪日客が明確にしてくれた」と話す。

おにぎり店が大人気となり、下町の街並みを写真に収める訪日客。一方で、渋滞や混雑などの「オーバーツーリズム」が問題化している。後藤さんは「どの程度受け入れるのか、どんな観光客に来てもらいたいのか、何を失いたくないのか。根本から考える必要がある」と地域の人による対話の重要性を語る。

未来を見せる

「アーリはまなざし、というポイントに加え、訪れた人が目的地でどう振る舞うかというパフォーマンスについても注目するようになった」と紹介するのは立命館大教授（社会学）の遠藤英樹さん。それは旅行者となりうる全ての人に関わってくるのだ。

例えば東日本大震災の遺構や広島原爆資料館といった、死や喪失にまつわる場所を訪れた観光客がどう振る舞うのか。「当事者や土地の人の思いを100%理解しきるのは難しいかもしれない。だが、訪れた人が場にふさわしい振る舞いをすることはでき、そこから始まるものは確実にある」

旅行者が土地の人の声に耳を傾け、居合わせた相手の言葉を聞く。遠藤さんはこうした「ポリフォニック（多声的な）ツーリズム」の可能性を語る。「価値観も宗教も人種も違う中で人々がどう共生するのか。グローバル社会の一つの未来を見せてくれる現象として、観光はあるのではないか」

観光に不可欠な移動についても環境への負荷の観点からあらためて問われている。観光、仕事で移動する人。やむを得ず他国を目指さざるを得ない難民…。「移動の権利は保障しなければならない」と遠藤さんは言う。

問われるのは移動の倫理性だ。「お金さえ払えば思うままに移動してよいというのではなく、どんな移動ならばよいのか、考えなければならない時代だ」

「猫島」通じて考える 場所の価値を再確認

東京国際大教授（社会学）の柄本三代子さんは、多くの猫が住み「猫島」と呼ばれる宮城県・田代島でのフィールドワークを基に「ふつうの猫しかいない『猫島』に人はなぜ訪れるのか？」と題した論考を6月刊行の「猫社会学、はじめます」（筑摩書房）に寄せた。

猫と触れ合いに観光客が訪れる田代島。その多くは、動画やSNS（交流サイト）で事前に予習をし「あらかじめ抱いたイメージを確認するために訪れるのではないか」とみる。「外からのまなざしによってその場所の価値が再確認されることもある」

一方で「実際に訪れると、島が限界集落であることに気が付く。そこから問題に関心を持つ人もいるかもしれない」とし、観光的な視線だけでない、別の「メガネ」を持つ大切さを説く。

食やリスクについての研究も行っており、東日本大震災後、調査のため福島県などに通い続けている柄本さん。「人手の足りない農家を訪れ農作業に参加させてもらっている。あの意味、これもツーリズムだと思う」と話している。

「らせんの風景『振る舞いや倫理性問う』」、沖縄タイムス2024年12月4日、朝刊13面
（共同通信配信）沖縄タイムス社提供